

二工一ヨ一ク補習授業校

平成二十一（二〇〇九）年度

答辞・送辞

送辞

在校生代表 LI校高等部一年

加納 達也

平成二十二年三月十四日、日曜日。今日のこの日は、卒業生の皆様にとつて、きつと歴史に残る日になるのではないのでしょうか。皆様は、このすばらしいオーディトリウムで、ある目標を達成したのです。その目標とは、これまで九年間、あるいは十二年間という長い時間をかけて皆さまが目指した「卒業」です。

その目標を達成し、うれしさでいっぱいの人もいれば、終わってしまつた寂しさを感じている人もいます。しかし「卒業」とは、皆様が目指す最終ゴールではないと思います。

人生をテレビドラマに例えてみると、「補習校の卒業」とは、ドラマや小説で言うイントロダクション、つまり「導入部分」にあたるのではないのでしょうか。ドラマを、始まりからたつた十分程度見ただけでは、何がどうなっているのか分かりません。主人公やその周りの登場人物、そして舞台設定のおよその背景がわかるぐらいです。「人生」のなかでイントロダクションにあたるのは、子ども時代、つまり今の僕たちの時期のことです。皆さまも、目標はひとつ達成したかもしれませんが、実はまだ何も始まっていないのです。僕たちはまだ、世の中のことを何も知らないのです。

まだ何も知らない僕たちが、人生というドラマの初めの十分間にあたる補習校で、勉強以外に学ぶべきことがあると気づくことができたのは、今日卒業していく先輩のおかげだと思います。僕自身は、先輩の皆さまからリーダーシップについて、そして後輩や先輩への接し方を学ぶことができました。

僕は中学一年の時から生徒会に入り、クラス委員や副会長を務めてきました。先輩方は、運動会で応援団を作り、幼児部から高等部までみんなが楽しむために盛り上げたり、球技大会のときは仲間はずれにされている子がいないかを確認したりしていました。中等部だったころの僕の目には、リーダー役はみんなを笑わせ、自分たちも運動会を心から楽しんでる人たちで、誰にでもできる簡単なものに見えていました。

今年、僕も運動会の応援団にかかわつてみて、リーダーの役割がとても大変なことを知りました。リーダー役は、ただ目立つ人ではなく、みんなの目に見えない場所で作業をするのです。赤白対抗の応援合戦の内容を考え、早くから練習を始めるため、生徒に前もって連絡をします。グループが十人以上になると、連絡を取るのがとても難しくなります。メールをあまり見ない人やテキストメッセージをもらっても返事をよこさない人がいるからです。それでも何とかして、出し物のダンスのステップを完成させ、劇の台本を考えて、メンバーひとりひとりの演技や動きを伝えなければなりません。先輩たちは、自分だけで決めてしまうのではなく、後輩の意見もたくさん取り入れてくれました。こういうことは当たり前だし簡単だと思っていました。自分が体験してみても、はじめてそのむずかしさを肌で感じました。

昨年十二月、LI校中高等部でたいへん深刻な事件が起きました。それはトイレでのいたずらでした。男子トイレの壁に紙タオルを濡らして投げつけて引付けてあるのが発見されたのです。僕たちの補習校は、現地校の校舎を借りているので、現地校の建物や備品に対するいたずらは大問題になるのです。それが原因で、校舎を借りることができなくなったら、僕たちが学ぶ場所がなくなるのです。

三階には部外者が立ち入り禁止になっているので、中高等部の生徒と先生しかいません。紙タオルのいたずらは、土曜日の授業が始まつてから見つかったので、補習校、それも中高等部のだれかのしわざだとすぐにわかりました。

事件のあつた次の週、こういう問題が二度と起こらないようにするため、生徒会が中高等部の生徒全員をあつめて会議を開きました。先生方も教室に入ってきましたが、先輩たちは「僕たちの問題だから、僕たちに解決させてください。先生たちは教室から出てください。」と言ひ、ドアを閉めました。

集まつた後輩たちの間には、軽い空気があつて、どうやらトイレ事件を深刻な問題に受け止めていないようでした。教室の後ろに座っている生徒たちは、ざわざわと私語を続け、ほとんどの生徒がこの問題を他人事のように思っていました。僕はこのままでは話し合いは進まないと思いました。今、僕がみんなをどなって静かにさせたほうが

がいいんだろうか、どうしようか、とためらっていた時、先輩たちが、普通の声でみんなに静かにするように促すと、自然にみんなが静かになりました。

そして生徒会長がみんなに目を閉じるようにいい、だれがやったかやさしく聞きました。すぐに手を挙げる人はいませんでした。何人かの生徒が手を挙げるのをためらっている様子だったので、もう少し待ってみました。すると二分もたないうちに「僕たちがやりました」と名乗り出てきました。会長は「では、前に出てきてください」と声をかけ、何でそんなことをしたのかと尋ねました。ある少年は「みんながやっていたからぼくもやりたくなかった」と言いました。「わかりました。僕たちからは誰がやったか、先生には伝えません。でも本当に反省しているなら、君たちから直接、先生に伝えなさい」といいました。ぼくは、ただ先輩たちをフォローすることしかできませんでした。この事件で僕は、空気を読みながら人前で話すことの難しさ、他人を説得することの大変さを実感しました。そして先輩たちの落ち着いて問題を解決する態度から大切なことを学んだような気がします。

さて、皆さまが卒業した後、補習校のドラマは続きます。一方、卒業生の皆さまは、明日からひとりひとり違ったシナリオのドラマを繰り広げることになります。イントロダクションのしっかりしたドラマは、必ずよいドラマになります。皆さまの将来が、人に感動を与え、考えさせるドラマや僕たちの指針となるようなドラマになると信じています。

最後になりますが、応援と尊敬の気持ちをこめて、卒業生の皆さまへこの言葉を送ります。「これからいいドラマを作り続けてください。いろいろ教えていただきありがとうございます。そして、ご卒業おめでとうございます。」

僕が補習校に入学してからもう七年がたちます。でも、僕が入学する前から、姉の送り迎いで母と一緒に毎週補習校に来ていたので、本当はもう補習校に九年間ぐらい通ったことになりす。僕はいつの間にか、一番下級生の幼児部から、一番上級生の六年生になっていました。今振り返れば楽しい事もたくさんありましたが、つらいことのほうが色々あった気がします。

補習校が本当に楽しかったのは、正直に言えば幼児部くらいでした。幼児部では、僕の好きな工作や遊びをいっぱいやったので、その時は補習校が楽しい所だと思えました。その上、その頃の僕は勉強をしないで我慢できませんでした。だけど一年生になってからその思いは、いつきになくなりました。楽しいはずの補習校がなんでこんなにつまらなくなってしまうんだろうと何度も思いました。それとあんなに楽しみにしていた勉強が、こんなにつまらなくて難しいとは思いませんでした。

それと、何でせっかくの土曜日なのに、学校に行かなくてはいけなのかが分かりませんでした。今もたまにそう思います。現地の友達達はみんな遊んでいるのに、なぜ僕だけ勉強しなくてはならないのだろうとも思いました。たとえば、当時の僕はボーイスカウトに入っていました。僕が行きたかったボーイスカウトのイベントは、すべて補習校と同じ土曜日に行われたので、僕はそのほとんどに行けませんでした。それも有り、僕は、補習校をやめたがりました。その事で両親と何度も喧嘩をしました。それである日、母にかなり怒られて、

「補習校がそんなに嫌ならもうやめなさい！」

など、言われて、本当にやめようと思えました。だが、以前母と喧嘩したときに、言われた事を思い出しました。

「補習校で苦しんでいるのは、あなただけじゃないのよ。」
また、

「今、補習校をやめればどんどん日本語を喋ったり、読んだり、書けなくなっちゃうかもしれないけど、それでもいいの？」

と言われたのを思い出し、今僕がやめれば、もう好きな漫画を読めなくなるかもしれない上、まだ補習校に通っている友だちにもう会えなくなるのも嫌だったので、また頑張る事にしました。

しかし、その考えは、またすぐに変まりました。なぜなら三年生ぐらいになってから勉強と宿題が難しくなった上、量が多くなったからです。宿題が、あまりに嫌でどうすれば良いのか、分からなくなるほどでした。あまりにストレスが溜まり過ぎて、家族に八つ当たりをしたり、ひどい時は、ものを壁に投げつけたりしていました。母に、

「宿題やった？やってなかったら今すぐやりなさい！」

と毎日、言われてもう頭が爆発しそうでした。父にも何度も宿題の事でしかられました。宿題から逃げられないと知っていても、なかなかやる気にはなりません。宿題は僕にとっては登らなくてはいけない大きな壁です。今でもこの壁を登り続けています。それともう一つ苦労したのは漢字でした。一年と二年生の時は、簡単に漢字なんて覚えられたのに、三年生から急に難しくなり、覚えられない漢字がほとんどになりました。漢字テストは最近になってようやく百点に近い点数が取れるようになりました。

このようにつらい事が色々あっても、ここまで来る事ができたのは、今まで僕を支えてきてくれた僕の友だち、僕がお世話になった先生達と、両親がいたからです。友だちは、勉強で分からない所があれば教えてくれるし、心が傷ついた時にはいつもそばに居てくれました。君達が居たから補習校が面白く感じてきました。僕は、A校に進みます。僕自身も驚いています。A校に進む事にしたのも、君達がいたからです。それと今まで僕がお世話になった先生達も僕にとっては、大切な人達です。あまり優しくもない先生もいましたが、勉強で分からない所があれば、分かるまで、時間など関係なく教えてくれる先生に出会った時は、すごく嬉しかったです。それと最後に、僕の両親です。しかられる事もありましたが、二人とも僕をいつも優しく見守ってくれて補習校が嫌になってもいつも僕に希望を与えてくれました。

僕と共にA校に進む人達、これからもよろしくお願ひします。今日でお別れの友だち、君達の事は忘れません。この七年間お世話になった先生達、お父さん、お母さん、皆さんどうもありがとうございました。

答辞(Ⅱ)

Ⅰ校初等部卒業生代表 島 太郎

本日は、このようなすばらしい卒業式を開いていただき、ありがとうございます。また、校長先生をはじめ来ひんの皆さん、在校生の皆さんから頂いたあたたかいお言葉もありがとうございました。

そして今、僕が何よりも感謝しているのは、補習校に六年間通えた！このシンプルな事です。僕にはブラジルに二人の従兄弟が居ます。従兄弟達は、日本語を勉強したいのに補習校が近くにないので、通信教育を受けるしかありません。でも僕たちは沢山の友だちといっしょに、いろんな先生から教わる事ができました。外国にいて日本語を勉強できる。これは僕達にとつて特別な事ではないかもしれないけれど、世界中で考えたら、とても恵まれた環境だと思えます。

入学したての一年生のころ、六年生は、ずいぶん大きなお兄さんやお姉さんに見えました。いつのまにか自分自身がそんなお兄さんになってしまったことが不思議でたまりません。こうして壇上に立っていると、補習校で過ごしたいろんな出来事が次々とよみがえってきます。毎週土曜日。宿題に追われながら通った日々。金曜日の夜、明日は行きたくないなあ…と思う日もずいぶんありました。今日卒業するみんなも、きつとそうだったと思います。

毎年みんなが楽しみしていた6月の運動会。赤と白に別れ、思いっきり声を張りあげて応援しました。一月はじめには、ちよつと緊張して書いた書き初めや、お餅つき大会、きねでおもいっきりついたお餅の味は最高でした。三年生でクラスの“モチモチの木”の劇ではみんなまで何回も朗読の練習をしました。

このような学校生活を通して得た最大の成果。それは、こうして日本語が話せるように、そして読めるように、書けるようになったことです。もちろん言葉だけでなく、さまざまな形で、日本の文化にふれることもできました。毎年夏、日本の小学校に体験入学できたのも、ここで勉強をしたおかげです。英語環境で、日本語も身につける。それはとても難しいことではありますが、同時に、なかなかできない貴重な体験でもありました。

そして今日、私たちは卒業します。来年度からは、中学生としてここに通う友だちもいれば、現地の勉強に集中したいという仲間もいます。いずれにしても、ここで学んだ日本語の基礎は、僕たちの生涯の宝物であることに変わりはありません。

最後になりましたが、校長先生をはじめ、先生、そしてお父さん、お母さん、本当にお世話になりました。みなさんにあたたかく見守られながら過ごした六年間。この楽しく、有意義で、そして貴重な思い出を胸に、また一歩、未来に向かって前進しようと思います。これからも、変わらぬご指導をお願い致します。卒業生を代表し、ここでもう一度心から感謝の言葉を申し上げます。本当にありがとうございます。

答辞(IV)

A校中等部卒業生代表 小野 加晏子

人生というものをどう説明すれば良いのでしょうか。人生とは何かと聞かれたら、あなたはどうか答えますか？私にはどう答えば良いのか分かりません。人生の意味を国語辞典で引いてみるとこういう定義が載っていました。「人間がこの世に生きている期間、人の一生。」英語では人生を“Life”といいます。英英辞典を引いてみると、とても科学的な定義がなされていました。“The condition that distinguishes organisms from inorganic objects and dead organisms” 日本語と英語の定義の方法が、少し違うようですね。それはさて置いて、次は辞書に頼らずに自分自身で人生という言葉 を定義づけしてみようと思います。私は人生とは運命で描かれている と思いたいのです。いいえ確実にそう思います。なぜなら人生の出来事、 人との出会いは全部奇跡的だからです。皆さんもそう思いませんか？ それを私に教えてくれたのは補習校です。補習校で出会った様々な親 友と先生方。この地球に生まれて私達が出会えたのは補習校という環 境があったからです。

初等部三年生で補習校をやめた私は、日本の文化と触れ合うことが 劇的に減りました。塾には通っていましたが、補習校の様に運動会や 文化的な活動はもちろんありません。それが変わったのが中学一年生 の秋でした。姉が補習校に通いたいというので、体験入学をしに行っ たある土曜日でした。当日の朝にそのことを知った私は、突然私も行 きたいと勝手なことを親に言ったのを覚えています。何も考えず、口 から出たその言葉。今でも、なぜ私は面倒なことをわざわざ自分に押し 付けたのだらうと思います。土曜日の朝は寝坊ができると、嬉しく 思いながらやめた補習校だったのに、私はまた補習校という環境に戻 って行きました。喜んでいいのかどうか、よくわかりませんでした。

通い始めは後悔しました。思ったよりも勉強も人間関係も難しく、 少しも楽しくありませんでした。補習校になぜ来たのだらう、なぜあ の姉姉に付いて行ったのだらう。自分の間違いでこんな目に合わない といけないのだと、毎週自分を責めていました。それを変えたのはあ

る休み時間に飛んできた紙飛行機でした。「日本語、英語、どっちが得 意？」と書いてあったメッセージ。いきなりで戸惑ったけれど「英語」 と書いて投げ返したら、向こうは微笑みを浮かべ、「こっちに来て」、 と身振りで合図をしました。それまで話をしてくれなかった四人の 女の子がさり気無く私に優しくしてくれました。ノートを破った紙で 折られた紙飛行機が救いになったのです。

この紙飛行機を思い出すと、あの時声をかけてくれた友達に無限の 感謝を感じます。後で親しくなった友だちにも感謝の気持ち溢れ出 します。現地校とは違い、日本人であるという共通点だけでも安心感 がありました。同じ日本人でも、日本から来たばかりの友だちから冷 凍の焼きおにぎりの存在を知ったり、日本の独特な文化を毎週の様 に 話したりするのは本当に楽しいです。アメリカで育った友だちはアメ リカの文化への偏見がなくて、言葉と行動に迷いや戸惑いがなく、あ りのままに居ることに自信を持っているところなど、物の見方や捉え 方に共感し易いので、私も私のままでいられます。皆が私の人生の大 切な存在です。

さて、最初の議論に戻りますが、人生とはなんでしょうか。この答 辞で色々述べているのに、やはり「奇跡的」と言う言葉しか思い浮 かびません。補習校に通い始めた事、紙飛行機が飛んで来た事、冷凍 の焼きおにぎりを初めて食べた事も全部奇跡、または運命なのです。 ね？偶然ではない出来事が運命で、運命の重なりが人生では無いでし ょうか？私は補習校という運命的な出会いを得て、人生が何倍も楽し くなりました。今まで私たち生徒に一生懸命日本語を教えてください ました先生方、父母会の皆様、毎週補習校に送り迎えをしてくれた両親に 心から感謝しています。そして最後、沢山の思い出を作ってくれて、 涙が出てくる程笑わせてくれた中三のメンバー、本当にありがとう。 私たち中三は、何年たっても変わらない友だち。それを忘れずに、笑 顔で卒業しよう！

答辞(IV)

A校中等部卒業生代表 小野 加晏子

人生というものをどう説明すれば良いのでしょうか。人生とは何かと聞かれたら、あなたはどうか答えますか？私にはどう答えれば良いのか分かりません。人生の意味を国語辞典で引いてみるとこういう定義が載っていました。「人間がこの世に生きている期間、人の一生。」英語では人生を“Life”といいます。英英辞典を引いてみると、とても科学的な定義がなされていました。“The condition that distinguishes organisms from inorganic objects and dead organisms” 日本語と英語の定義の方法が、少し違うようですね。それはさて置いて、次は辞書に頼らずに自分自身で人生という言葉を定義づけしてみようと思います。私は人生とは運命で描かれていると思いたいのです。いいえ確実にそう思います。なぜなら人生の出来事、人との出会いは全部奇跡的だからです。皆さんもそう思いませんか？それを私に教えてくれたのは補習校です。補習校で出会った様々な親友と先生方。この地球に生まれて私達が出会えたのは補習校という環境があったからです。

初等部三年生で補習校をやめた私は、日本の文化と触れ合うことが劇的に減りました。塾には通っていましたが、補習校の様に運動会や文化的な活動はもちろんありません。それが変わったのが中学一年生の秋でした。姉が補習校に通いたいというので、体験入学をしに行ったある土曜日でした。当日の朝にそのことを知った私は、突然私も行きたいと勝手なことを親に言ったのを覚えています。何も考えず、口から出たその言葉。今でも、なぜ私は面倒なことをわざわざ自分に押し付けたのだらうと思います。土曜日の朝は寝坊ができると、嬉しく思いながらやめた補習校だったのに、私はまた補習校という環境に戻って行きました。喜んでいいのかどうか、よくわかりませんでした。

通い始めは後悔しました。思ったよりも勉強も人間関係も難しく、少しも楽しくありませんでした。補習校になぜ来たのだらう、なぜあの時姉に付いて行ったのだらう。自分の間違いでこんな目に合わないといけないのだと、毎週自分を責めていました。それを変えたのはあ

る休み時間に飛んできた紙飛行機でした。「日本語、英語、どっちが得意？」と書いてあったメッセージ。いきなりで戸惑ったけれど「英語」と書いて投げ返したら、向こうは微笑みを浮かべ、「こっちに来て」と身振りで合図をしました。それまで話をしてくれなかった四人の女の子がさり気無く私に優しくしてくれました。ノートを破った紙で折られた紙飛行機が救いになったのです。

この紙飛行機を思い出すと、あの時声をかけてくれた友達に無限の感謝を感じます。後で親しくなった友だちにも感謝の気持ち溢れ出します。現地校とは違い、日本人であるという共通点だけでも安心感がありました。同じ日本人でも、日本から来たばかりの友だちから冷凍の焼きおにぎりの存在を知ったり、日本の独特な文化を毎週の様にしたたりするのは本当に楽しいです。アメリカで育った友だちはアメリカの文化への偏見がなくて、言葉と行動に迷いや戸惑いがなく、ありのままに居ることに自信を持っているところなど、物の見方や捉え方に共感し易いので、私も私のままでいられます。皆が私の人生の大切な存在です。

さて、最初の議論に戻りますが、人生とはなんでしょうか。この答辞で色々述べているのに、やはり「奇跡的」と言う言葉しか思い浮かびません。補習校に通い始めた事、紙飛行機が飛んで来た事、冷凍の焼きおにぎりを初めて食べた事も全部奇跡、または運命なのですよね？偶然ではない出来事が運命で、運命の重なりが人生では無いでしょうか？私は補習校という運命的な出会いを得て、人生が何倍も楽しくなりました。今まで私たち生徒に一生懸命日本語を教えてくださいました先生方、父母会の皆様、毎週補習校に送り迎えをしてくれた両親に心から感謝しています。そして最後、沢山の思い出を作ってくれて、涙が出てくる程笑わせてくれた中三のメンバー、本当にありがとう。私たち中三は、何年たっても変わらない友だち。それを忘れずに、笑顔で卒業しよう！

答辞 (V)

LI校高等部卒業生代表 加納 あゆみ

私は今、正装した約四百人の補習校関係者の前で、膝をふるわせながら立っている。それは、私が二ヶ月ほど前にLI校高等部の代表として、卒業式の答辞を述べることになったからだ。いざ下書きを書き始めると、言いたいことが多すぎて、どこから始めていいか、どこまで話せばいいか分からなくなった。私が十一年間かけて補習校で感じてきたことと、卒業するこの今の気持ちを原稿用紙四枚にまとめるといふのは、とても困難だった。しかし、この状況になって、初めて最後に一番伝えたいことが何なのか分かったような気がする。

補習校に在籍するということは、現地校で出される宿題とプロジェクトに加え、補習校の宿題を両立しなければならぬということ。その上、私にとっては、クラスが八人しかないということもあり、生徒会の仕事、アルバム係の仕事、クラスのイベントの準備など、全てをこなさなければならぬということなのだ。

「そこまでして、私はなぜ補習校に通い続けたのだろう。」という間に、今の私なら、こう答える。「胸を張って卒業式に出るため」と。

現に私は今、皆さんの前でスピーチをしている。この時のために、今まで習ってきた日本語の単語、慣用句、漢字を駆使して原稿を書いた。先ほど使った「困難」という言葉の意味も説明できる。完璧に理解していない字があっても、辞書の引き方を習ったので、調べることでできる。英語に訳すことも無理なことではない。この原稿は、私の十一年間の国語の学習のたまものだと言っても過言ではないのだ。こうやって自分で書いた文章を朗読する術も、補習校で習得した。これから社会に出ても、補習校で得たこの能力を、忘れずに、活かして行くことができる。今の私達には、そんな力がある。

私は、このステージに立つことが出来て、心から嬉しいと思う。いつも恥ずかしくて、つい飲み込んでしまう感謝の言葉も、この場を借りて、お世話になったたくさんの人達に、伝えることができるからだ。

まず最初に、毎週、文句ひとつ言わず送り迎えをしてくれた父、早起きをして手の込んだお弁当を作ってくれた母、私達のために授業を

用意してくれた先生方、陰で支えてくれていたスタッフの皆さんにも、心よりお礼が言いたい。

私が高等部まで進級してきて気づいたことは、初等部、中等部、高等部の違いだ。それは、運動会で、一番明らかだった。小学生の頃は私は運動会を、「一日中遊べる日」としか認識していなかった。中学生になると、ボランティアの仕事を与えられたり、応援団の団員になることが許されたりして、責任感を覚え始めた。しかし、高校生にもなると、今度は「仕切る側」になり、運動会の見方が百八十度変わった。去年見た運動会の景色には、一生懸命、放送局で次の競技の相談をしている先生方、お昼休みのお弁当の用意をしている父母の方々がいた。その様子を見て私は、初めて、彼らなしでは運動会に限らず、他のイベントも成り立たないことを実感したのだ。本当に、お世話になりました。

卒業した今でもたまに顔を出しに遊びに来られる先輩方、明るく元気をくれる後輩達、私の友人であり、ライバルでもあるクラスの皆も、私の心の支えなのだ。日本語の勉強だけなら一人で教科書を開けばできる。しかし、補習校では、運動会の応援団の練習をしたり、球技大会のチームでユニフォームの相談をしたりと、授業以外でも、皆で、汗水流してがんばってきた。

「これらの行事に参加することに、どんな意味があるのだろうか。」この答えも、「今日(卒業式)」にあると思う。他の人達の答辞を聞きながら、みんな自分達の補習校での思い出を振り返っていただろう。球技大会での苦い思い出や、ボーリング大会での楽しかった思い出、いろんな記憶と感情が今、この会場で飛び交っていることだろう。私が今、補習校での思い出を振り返って、これ程までに満ち足りた気持ちになれるのは、みんなと一緒にがんばったからだと思う。補習校へ来る楽しみをくれて、本当にありがとう。

最後に、先ほど渡された筒を開けてみよう。卒業証書には、他でもない、自分の名前が書いてある。私には、その横に書いてある文字が、「今までがんばってきたで賞」という字に見える。単なる証明書ではなく、「卒業の賞状」なのだ。この賞状を手にするために私達は、毎週金曜日の夜遅くまで宿題をし、土曜日に早起きをして、がんばってきた

たのだ。そんな自分を褒めるきっかけをくれる。皆に「おめでとう」と言ってもらえる。卒業式は、その様なご褒美もくれる。

私達、高等部二年生は今日、補習校を卒業する。今のこの気持ちを、これから中等部・高等部へ進学する人達に感じてほしい。精一杯、補習校生活を堪能してほしい。悔いなく、胸を張って補習校を卒業してほしい。自分がなぜ補習校に通うのか、なぜがんばるのか、また数年後の今日、聞かせてもらうのを楽しみにしている。

答辞 (VI)

A校高等部卒業生代表 小野 未紗子

八年前、小学三年生で初めて補習校に入学した時、私がこの台に立って答辞を読むことになると思うでしょう。今思うと信じがたいですが、当時日本からアメリカに引っ越してきた私は、日本では小野怪物と呼ばれていたくらいで、補習校でも好き放題していました。ボスの気分でクラスメートの男子を蹴飛ばしたり、漢字テストでカンニングをしても当たり前のように十三点を取ったり、不真面目で何も気にしていなかった自分がいました。ふざけてばかりいたそんな私が、今日みなさんの前で答辞を読むことが本当に不思議でたまりません。

急に変化が訪れたのは、五年生の二学期でした。ずっとやんちゃにしていたせいでしょうか、なぜかこのままではいけない、と焦り始めたのです。そこで補習校を止めて塾に通う決心をしましたので、先生や家族や友だちに、目をまんまるにして驚かれたのをよく覚えています。中学三年生の夏になると、塾や現地校の日本人の友だちが高校受験でどんどん帰国していき、私の周りには日本人がいなくなっていました。中学三年と言えば一番仲間が欲しい時期。私はやはり日本人が好きで一緒にいると安心できるので、これから先どうしようかと思っている時に、ふと頭に浮かんできたのが補習校でした。

補習校に戻ったら、日本人の仲間ができる。私は、そんな期待を持ちながら、中学三年生の秋から再び補習校に通い始めました。けれども、待っていたのはがらりと変わった風景でした。アメリカ生活が長い生徒やアメリカで生まれ育った生徒がほとんどで、日本語より英語を使うことが多かったです。最初の頃の私はアメリカな補習校を受け入れることができなくて、戻って来た事を後悔することもありました。けれども、毎週土曜日とにかく起き上がって登校するにつれて、自然とクラスのリズムに合わせることで大爆笑をしたり、のみの市でクレープの味見をして感動したり、国語の授業で深い内容の意見をぶつけ合った

り、募金活動の時に誰が一番お金を集められるかを競ったりと、様々な経験を重ねてきました。特になにも起こらなくて平凡に過ぎていった土曜日、行事があつて盛り上がった土曜日、どんな土曜日でも、毎週一緒に過ごした仲間とは一つの絆で繋がっていたのです。そして気がつくとも、私もアメリカに長い日本人の一人であり、クラスメートとの共通点が多いことに気づいたのです。

私は日本を離れたため、完璧に日本を知ることはできないし、アメリカに住んでいるからといって、アメリカを全部理解できる訳でもないと感じた時、自分は何んて中途半端な存在なのだ、と思いました。日本人として現地校で感じる事や、アメリカ人として補習校で感じる事、色々な思いをしながら、私は一体誰だろう?と思っていました。けれども、私以外にもそう感じている人達が補習校にすることに気づいた時、心の底から安心しました。お互いに日々、文化の違いによって感じている疑問や矛盾、喜びや幸せを分かち合うことができたのです。写真には残らないし、目には見えないけれど、共感しあえたこと、それが私にとっての一番の支えでした。さらに私は日米両国を客観的に眺めることを学び、それはどれだけ大切に特殊なことかと思ってきました。私は決して中途半端な人間ではなくて、今の世界が必要とする人間かもしれないと考えました。社会へ出る前からもうすでに多様な文化に触れ、色々な考えを認め合い、尊敬し、協調することができのだという誇りを持つようになりました。私はアメリカに残っても日本へ帰っても世界のどこへ行っても、いつも広い心でものごとを受け止め、大きな視野で見えていくことを大切にしていきたいと思えます。それが生きて行く上で一番の力になるのではないのでしょうか。それを知ることができたのは補習校に通ってきたからだと思えます。

これから新しい世界へ進んでいく卒業生の皆さん、私たちはどんな人生を歩んで行くのでしょうか。私はすごくワクワクしています。私達は素晴らしい環境にいて、可能性に満ちていて、チャンスも溢れています。もう準備万端なのですから、何にでも飛び込んで行けるのです。けれども、今まで何百回と送り迎えをしてくれたお父さんお母さ

ん、時には怒りながらも温かく一生懸命に指導して下さった先生方、そしてすべてをサポートして下さった父母の方々がいらつしやらかなければ、こんなにも前向きに進んで来られませんでした。今まで本当にありがとうございます。そしてニコル、よしき、はな、じゅん、みか、今日みんな卒業できるのが嬉しくてたまりません。いままでも沢山笑わせてくれてありがとうございます。これから笑顔で会いましょう。沢山の感謝を込めて本当にありがとうございます。